業務言語としての英語：ジュネーブ、香港、ドバイとの比較

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

ジュネーブ：英語圏の業界におけるフランス語圏の金融センター

ジュネーブとシンガポールは、言語の問題に正反対の側から向き合っています。ジュネーブは、主にドイツ語を話す国の中にあるフランス語圏の都市であり、世界共通語が英語である業界で活動しています。ジュネーブ巻によれば、フランス語は今なお州人口の79%にとって主たる言語です。一方、12%の住民の主たる言語である英語は、金融センターの第二の業務言語となっています。[1]州憲法はフランス語を公用語と定めています。[2]連邦法は3つの正文の言語版で存在しますが、規制当局の通達や裁判所の判決は、ドイツ語、フランス語またはイタリア語で公表されます。

それでも、スイス法において英語は浸透しつつあります。2025年1月1日に施行されたスイス民事訴訟法の改正により、州は国際商事裁判所を設置し、その手続において英語を認めることができるようになりました。連邦最高裁判所は2021年以降、国際仲裁判断の取消手続において英語による書

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

面の提出を受け付けています。[3]こうしてスイスは、シンガポールが当初から占めていた立場へと近づいています。ただし、その動きは部分的なものにとどまります。英語で審理するスイスの裁判所であっても、ドイツ語とフランス語で概念が形成された債務法を適用します。これに対しシンガポールの裁判所は、英語で業務を行い、英語で構想された法を適用します。

この比較からは、ジュネーブ独自の強みも見えてきます。フランス語は、ジュネーブをフランス、ベルギー、ルクセンブルク、ケベック、マグレブ諸国、フランス語圏アフリカの顧客と結びつけています。これらの顧客は、自らの言語で用件を話し合い、書類に署名することを好みます。英語にはシンガポールにとってこれに相当する役割はありません。英語はシンガポールをあらゆる人々と結びつけますが、特定の誰かと結びつけるわけではないからです。ジュネーブにとってのフランス語に当たるものは、シンガポールでは中国語（標準中国語）、マレー語、タミル語です。これらの言語は、シンガポールを中国、マレー世界、南インドと結びつけています。この第二の層については第J部第II章で検討します。

香港：2つの公用語と中国語の引力

アジアで最も近い比較対象は香港です。シンガポールと同様に、香港は植民地行政とコモン・ローの言語として英語を受け継ぎました。シンガポールと異なるのは、住民の圧倒的多数の第一言語が広東語であり、主権国の言語が中国語である点です。1974年の公用語条例（Official Languages Ordinance）は中国語と英語を同等の地位を持つ公用語としましたが、1995年の改正までは、裁判所の手続で中国語を使用することはできませんでした。[4]1997年以降は、基本法が、行政、立法、司法の各機関は「中国語に加え、英語も公用語として使用することができる」と定めています。[5]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

この文言は示唆に富んでいます。香港では英語は追加の言語であり、中国語と並んで使用が認められているにすぎません。シンガポールでは、憲法が英語に優先的地位を与えていないにもかかわらず、英語はすべての機関の業務言語です。香港の金融セクターは今も英語で業務を行っていますが、裁判所では中国語で審理される事件が増え、立法会の討論は主に広東語で行われ、本土とのつながりは標準中国語を通じて築かれています。中国と取引したい顧客にとっては、香港の二言語併用は利点です。すべてが英語で機能するアジアの拠点を求める顧客にとっては、シンガポールの方が自然な選択となります。

ドバイ：アラビア語の法秩序の中にある英語の島

ドバイは第三の道を選びました。ドバイ国際金融センター（DIFC）は、2004年ドバイ法第12号によって独自の裁判所を設置しました。これは、一般的な法秩序が大陸法でアラビア語を用いる国家の中に置かれた、独立した英語のコモン・ロー司法機関です。2011年にはドバイ法第16号により、当事者が合意すれば、DIFC裁判所はあらゆる国内事件および国際事件を審理できるようになりました。[6]このモデルは、金融業界が英語の法をいかに高く評価しているかを示しています。同時に、その限界も示しています。金融フリーゾーンの外では、ドバイの法と裁判所は依然としてアラビア語だからです。シンガポールは、同じ英語の法を全領域で、あらゆる取引とあらゆる裁判所について提供しています。

金融センターのランキング

2026年9月に公表された第40回国際金融センター指数（Global Financial Centres Index）では、ニューヨークが1位で、ロンドン、香港、シンガポールがこれに続き、ドバイは9位、チューリッヒは10位、ジュネーブは12位でした。[7]このランキングは、英語が上位に入るための前提条件ではないことを示しています。上海、東京、ソウル、深圳が5位から8位を占めているからです。とはいえ、国際的な個人資産とクロスボーダー取引をめぐって

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

競い合う金融センターの間では、英語の法と規制は、時間帯と同様に共通のインフラの一部となっています。これらの金融センター間の競争については、第K部第III章で詳しく検討します。

数字で見る

5歳以上の住民が家庭で最も頻繁に話す言語としての英語：1990年18.8%、2000年23.0%、2010年32.3%、2020年48.3%、2025年58.1%。標準中国語：2010年35.6%、2025年26.6%。中国語の方言：2025年4.9%。英語を教授言語とする学校の生徒の割合：1960年代初頭に約50%、1970年代末に約90%。1978年のゴー報告（Goh Report）による、2つの言語で最低限の能力を有する生徒：40%未満。シンガポール・フリースクールの開校：1834年8月1日、男子生徒46名。クイーンズ奨学金の創設：1885年。英語が学校制度の第一言語に指定：1987年。スピーク・グッド・イングリッシュ運動の開始：2000年4月29日。オックスフォード英語辞典に収録されたシングリッシュの語：2016年に19語、2026年に11語を追加。憲法第153A条に基づく公用語：4言語、国語はマレー語。[8]

注

1. ジュネーブ巻 *Genève, place financière internationale*、第J部第III章参照。同章は *Tribune de Genève*、2026年4月23日、および *20 minutes*、2024年7月23日（OCSTATデータ）を引用しています。 ↩

2. Constitution of the Republic and Canton of Geneva of 14 October 2012、第5条第1項。ジュネーブ巻第J部第III章における引用による。 ↩

3. 2025年1月1日施行のスイス民事訴訟法第129条第2項(b)、および2021年1月1日施行の連邦最高裁判所法第77条第2bis項。ジュネーブ巻第J部第I章、節「L’anglais devant les juges suisses」に記載。 ↩

4. Wikipedia, “Official Languages Ordinance”（2026年11月最終閲覧）：1974年1月11日に導入され、1974年2月15日から施行。中国語と英語

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

は“declared official languages with equal status”。“Chinese could not be used procedurally in the courts until an amendment was made in 1995”。 ↩

5. Basic Law of the Hong Kong Special Administrative Region、第9条（“In addition to the Chinese language, English may also be used as an official language by the executive authorities, legislature and judiciary”）、およびコモン・ローの維持に関する第8条。basiclaw.gov.hk（2026年11月最終閲覧）。 ↩

6. Wikipedia, “DIFC Courts”（2026年11月最終閲覧）：DIFC司法機関は2004年の“Dubai Law No.12”により設立され、裁判所は2006年に業務を開始。“independent English language common law judiciary”。2011年10月31日に署名された2011年ドバイ法第（16）号は、当事者の合意を条件として“allowed the DIFC Courts to hear any local or international cases”。 ↩

7. Wikipedia, “Global Financial Centres Index”（2026年11月最終閲覧）：GFCI 40、2026年9月：ニューヨーク1位（761）、ロンドン2位（757）、香港3位（756）、シンガポール4位（755）、上海5位、東京6位、ソウル7位、深圳8位、ドバイ9位（750）、チューリッヒ10位（749）、ジュネーブ12位（747）。2026年9月16日公表。 ↩

8. 上記の各注に引用した出典：Wikipedia, “Languages of Singapore”, “Language policy in Singapore”, “Education in Singapore”, “Raffles Institution”, “Queen’s Scholarship”, “Speak Good English Movement” および “Singlish”（いずれも2026年11月最終閲覧）。Constitution of the Republic of Singapore、第153A条。 ↩

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice.

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.